

ラテンアメリカ研究所創設50周年を祝って

立教大学総長

吉 岡 知 哉

立教大学ラテンアメリカ研究所創設50周年に際し、心からのお祝いとともに、研究所の活動を担っておられる方々、支援してくださっている皆さまに深甚なる敬意と謝意を表したいと思えます。

ラテンアメリカ研究所規則第2条は、「研究所はラテンアメリカの政治・経済・社会ならびに文化一般の研究および研究者相互の協力を促進し、あわせて、ラテンアメリカ諸国民および関係諸機関との連絡と協力を図ることを目的とする」と定めており、研究所は半世紀にわたってラテンアメリカ研究の充実と研究者の養成に力を注いできました。

日本とラテンアメリカとは歴史的に深い関係を積み重ねてきました。遡れば、17世紀初めの慶長遣欧使節団がメキシコ、キューバを経由してスペインに渡っています。明治日本は、1873年（明治6年）にペルーとの間で国交を開き、1888年には、メキシコと初の対等条約である日墨修好通商条約を結びました。その後、ブラジル（1895年）、チリ（1897年）、アルゼンチン（1898年）等の諸国と国交を樹立し、日本からの移民も急速に増えていきます。現在では、ブラジルをはじめとする国々から日本に多くの人々が働きに来ていることもよく知られています。文化的な関係も深く、ラテン音楽やダンスは昔から多くのファンを集めていますし、ラテンアメリカ文学は、日本の戦後文学にも大きな影響を与え続けています。

わが国におけるラテンアメリカ研究は、優れた研究者たちによって高い水準を維持していますが、ラテンアメリカと日本の歴史的関係から考えると、単純に量の点から言っても、これからの一層の発展が望まれます。

研究の発展には社会全体が持つ関心の高まりがなくてはなりません。ラテンアメリカ研究所は、1963年に創設されるとすぐ翌年からラテンアメリカ講座を開講し、語学とラテンアメリカ事情に関する市民講座を展開しています。また、公開講演会は、政治経済、社会問題から音楽や映画に至るさまざまな領域について多彩なテーマを取り上げてきました。これらの文化活動を通じて、ラテンアメリカについてより深く学び始めたという人も多いと思えます。

現在、グローバル化が進展する中で、大学においていかに豊かな国際性を育むことができるかが課題とされています。立教大学は2013年11月にブラジルのサンパウロ大学と大学間協定を結びましたが、このような関係もラテンアメリカ研究所の長い歴史があるからこそ可能となったのだと言うことができます。これからもラテンアメリカ諸国の大学や研究機関、そして民間の人々との多彩な交流を深めていきたいと思えます。

半世紀にわたる本研究所の活動を支えてくださった多くの方々に改めて感謝の意を表するとともに、研究所の更なる発展を願ってやみません。

（よしおか ともや）